

GCP Spotlight Vol.1

GCP（グローバル・シティズンシップ・プログラム）が大切にする「Away体験」。

新企画「GCP Spotlight」では、キャンパスを飛び出し、未知の環境で自らを磨き上げる「Away体験」を経て、自分らしい歩みを始めた学生たちに焦点を当て、その「リアルな今」を届けていきます。

記念すべき第1回目は、内閣府主催「世界青年の船（SWY）」に日本代表青年として選ばれ、1か月間にわたる洋上での多文化共生プログラムを経験した坂井理恵さん（法学部3年）にインタビューしました。世界13カ国から集まった青年たちと寝食を共にし、対話を重ねる中で彼女が見つけた「世界市民」の姿とは？等身大の言葉で語っていただきました。



—なぜ、このプログラムに挑戦しようと思ったのですか？

GCPの身近な先輩が参加されていたのがきっかけです。多文化共生には元々興味がありましたが、船という特殊な環境で、世界中の青年と1か月間、生活を共にするのは一体どういうことなのか。自分の目で確かめてみたいと思いました。

—船上では、具体的にどのような活動をされていたのですか？

今回の世界青年の船では、カメルーン、モンゴル、ギリシャ、パラオなど13カ国から青年が集まりました。2月15日から約1ヶ月間、タイ・バンコクを出航し、沖縄、愛知、東京を巡る航路の中で、寝食を共にする共同生活を送りながら、連日ディスカッションや文化交流を行いました。

私はその中でお琴クラブの一員として日本文化を紹介するステージに立ち、「さくらさくら」と「花は咲く」の2曲を披露しました。中高時代に箏曲部に所属していたこともあり、自分が大切に磨いてきた『お琴』という表現を通じて、世界中の友人と深く繋がることのできたのは、何物にも代えがたい貴重な経験でした。



——文化交流以外では、どのような活動をされていたのですか？

実は、文化交流だけでなく、社会課題について深く議論するコースディスカッションが活動の軸でした。私は「コミュニティデザイン」をテーマにした座学やディスカッションを行い、愛知県に寄港した際には、実際に地域コミュニティを運営されている企業や団体の方々のもとへ足を運びました。現場の第一線で活躍するの方々から直接お話を伺う中で、「若者が地域で生きがいを持って暮らすには何が必要か」という問いを深く掘り下げることができました。



13か国から集った160人の青年



全員でImagineを大合唱



日本文化紹介としてお琴を演奏している様子

——今回のフィールドワークや船上での活動を通じて、GCPでの学びが活きていると感じた瞬間はありましたか？

はい。今回の挑戦では、GCPで積み重ねてきた経験が、何にも代えがたい自分の強みになっていると強く実感しました。例えば、お琴の演目を成功させるために、船に乗る数カ月前からメンバーへの働きかけや練習会のセッティングを主体的に進められたり、ディスカッションの場では多様な意見がある中でも積極的に自身の意見を述べられたのも、GCPのプログラムゼミや成果報告会を通じて様々な価値観を持つ仲間と、ゼロから形にする難しさと喜びを何度も経験していたからです。

また、GCPという、互いに切磋琢磨し合える環境で日々訓練を積んでいたからこそ、未知のフィールドへ飛び出す勇気が持てました。そして、どんなに異なるバックグラウンドを持つ方々と出会っても、物怖じすることなく、本質的な対話を深めることができたのだと感じています。

——1か月間の航海の中で、最も心を揺さぶられた瞬間を教えてください。

各国が自国の文化を紹介し終えた後のことです。160人の青年全員で肩を組み、ジョン・レノンのImagineを大合唱しました。平和を願う歌詞を全員で口にしたとき、言葉にできないほど大きな感動が込み上げてきたんです。思い返すと、1か月間、私たちは船の上で衣食住を共にし、違いを認め合い、ときにはぶつかりながらも思いやる関係性を築いてきました。

「私が求めていた平和って、こういうことなんだ」と感じ、平和の実現に向けて自分に何ができるか、それを問い続けることが私の使命だと強く実感した瞬間でした。

——GCPに関心を持っている方や、後輩へメッセージをお願いします。

入学したばかりの私は、今の自分を想像もしていませんでした。GCPには、挑戦のきっかけをくれる先輩、背中を押して、ともに切磋琢磨する仲間がいます。今の環境から一歩踏み出すには勇気がいりますが、その先には自分の可能性を大きく広げる世界が待っています。皆さんも、GCPで「世界市民」への第一歩を共に踏み出しませんか？

編集後記:GCP Spotlight Vol.1

GCP Spotlight Vol.1を最後までご覧いただきありがとうございました。

インタビュー中も、世界の青年たちとの経験を思い起こしながら、自分自身の成長を確かな言葉で、そして何より楽しそうに語ってくれた坂井さん。彼女の瞳の奥には、世界の青年たちと肩を組み合ったあの日の「Imagine」の景色が、今も鮮やかに焼き付いているようでした。

「世界市民」という言葉は、時には遠く、大きなものに感じられるかもしれませんが、しかし、坂井さんのように中高時代から積み重ねてきた「お琴」という自分の引き出しを大切に、目の前の仲間に関心をもち、誠実にチームをまとめていく。そんな一人ひとりの「主体的な一歩」の積み重ねこそが、世界を変える力になるのだと、彼女の笑顔が教えてくれました。

このSpotlightシリーズでは、これからもキャンパスを飛び出し、多様なフィールドで自分自身の可能性を形にしていくGCP生の「リアルな今」をお届けしていきます。

次回もどうぞお楽しみに！

